IFFSアジアのショーへ

〈2〉

インドネシアが 総力でパビリオン

110社が従来製品を刷新出展

プラットフォームについてジェリー・タン氏に忌憚ない意見を聞いた。

――各ブースを見ると、スタイルや素材に非常に類似性が多い。

「コンセプトの共通性やトレンド面にわたるが、企業と学生のコラボとして、企業側がこうした製品をこれらの素材で、市場ニーズに触れる意見が出たり、製品化する過程の修正もあるだろう。だが、全部がそうしたことをしては目的の革新性、オリジナリティがなくなる。そうした点で共通性が出てきているのではないか」

――日本市場へ向けて訴求したいものは。

「先ず家具はサイズだと考えている。ポイントは二つあって、一つはシンプル、モダンであること。二つ目は細かいところまで行き届いた繊細な感性だと思う。これは日本市場へということではないが、素材も良いものを使い、デザイナー達をグループ化してデザインオフィスの設置も目指す。ゆくゆくは、著名なデザイナーを輩出してブランド化していくのが望ましい」

㊤アスミンドのタナンガ氏㊦ホンさん（女性）とヤンさん／碁石をイメージした円形チェアの前で

プラットフォームのブースで、変わったデザインの樹脂材の円形チェアをみた。白、黒の碁石をイメージした様なデザインで、ヤン・チン・ロンさん（男性）とホン・プイ・インさん（女性）の若い二人のデザイナーがデザインしたもの。共にファニチャー&プロダクトデザイン事務所に勤める。

コンセプトを聞くと「洋と東洋をイメージした」と答えた。いわゆる学生とその延長線上にある、若いこれからのデザイナーのチャレンジの場が出来た、それをジェリー・タン氏が政府の支援で注力。今後、シンガポールの家具デザインの向上と、世界市場へ向けてメーカーとのコラボ効果を高めていく、そういうテーマゾーンを設けたということだろう。

さて、IFFSにインドネシアがホール一を殆ど占めて、インドネシアパビリオンを構成した。まるでインドネシアの家具産業が総力を挙げて乗り込んできた、という印象だった。この主体はアスミンド（インドネシア家具産業&ハンドクラフト協会）で、エクゼクティブ・ディレクターのナンガ・カリム氏に出展意図などを取材した。

この場が偶然で、筆者が以前から知る「ホーム&ホーム」の林作新社のブース。インドネシアのパビリオンは五千八百平方㍍、参加百十社。容もまた、従来のイメージを刷新した。

（続く　長島）